

【担当教員】

原 信一郎

【教員室または連絡先】

環境システム棟267室

【授業目的及び達成目標】

数学は、今世紀初頭にヒルベルトによって提唱された公理主義の下、実在の物理現象を説明する責務から開放され、より厳密化、抽象化が進むとともに、研究対象を物そのものから空間や場の構造へと移した。この講義では、その流れをふまえながら、現代数学の考え方を端的に示すトピックを幾つか選び、紹介する。

【授業キーワード】

現代数学

【授業内容及び授業方法】

講義形式。必要に応じて参考書を紹介、あるいは資料を印刷して配る。

【授業項目】

毎年以下にあげるようなテーマの中から幾つかを選んで論ずる。
カテゴリー論と数学的構造、集合と位相、数理論理学、群と対称性、方程式とガロア理論、非ユークリッド幾何学、リーマン幾何学、トポロジー、計算数学

【教科書】

使用しない。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績の評価方法と評価項目】

レポート課題を与える。

【留意事項】

講義では理解するのに特に専門的な知識を必要としないように配慮するが、受講者には新しい数理的な考え方に強い興味を持っていることを期待する。

【参照ホームページアドレス】

<http://blade.nagaokaut.ac.jp/~hara/>

【担当教員】

小林 昇治

【教員室または連絡先】

環境システム棟268室

【授業目的及び達成目標】

あまりに狭い各専門分野に埋没してしまわないように、現代数学の分野から純粋数学を専門的に学んでいなくともその一部を概観できるようなものを選んで、数学の考え方の一端に触れさせる。

【授業内容及び授業方法】

受講生の人数によりゼミ形式で行うこともある。毎回かなりの量の自宅準備課題を課す。

【授業項目】

開講年度に応じて、数学のいろいろな分野から予備知識をあまり必要としないような話題を選択する。たとえば、数学基礎論、集合論、数論、偏微分方程式論、複素関数論、級数論、アルゴリズム論、解析幾何学、積分論、曲面論、調和解析、計算の理論、ゲーム理論など。

【教科書】

特に指定しない。必要ならばプリント等を配布する。

【成績の評価方法と評価項目】

レポート課題または学期末の試験による。

【留意事項】

この講義では数学のある分野を系統的に学ぶのではなく、根源に戻って自ら考える習慣をつけさせ、将来の学習や研究の一助とすることも目的の一つである。

【担当教員】

塩野谷 明

【教員室または連絡先】

体育・保健センター108室(内線9823,E-mail:shionoya@vos.nagaokau.ac.jp)

【授業目的及び達成目標】

ヒトが動く(運動・スポーツ)ということを経験的視点から人間-機械系として理解させるとともに、その知識に基づいて、自身(或いは他者)の運動能力を総合的かつバイオメカニクスの視点から評価できる能力を身に付けさせる。これらの学習過程をとおして、自らの専門領域とは別の領域でその専門性の応用を試みることで、技術科学の専門分野に関して、確固たる基礎的知識に立脚したより高い専門知識と応用力を有した技術者の育成の一助とすることを目的とする。この授業目的をそのまま広義の達成目標とし、また各授業項目の内容の理解を狭義の達成目標に位置付ける。なお、このスポーツバイオメカニクスでは、2学期経営情報システム工学専攻科目「スポーツ工学特論」における基礎としての内容を含んでいる。

【授業キーワード】

バイオメカニクス、呼吸循環系、AT、筋系、Hillの特性方程式、神経系、コンピュータシミュレーション

【授業内容及び授業方法】

ヒトが動くためのメカニズムを、呼吸循環系、筋系、神経系の視点からまとめるとともに、それらのシステムに対する工学的なアプローチを試みる。特にまとめとして、これらの3つのシステムに基づいた走運動モデルを構築、それを用いたシミュレーションからパフォーマンス向上への工学的アプローチを試みる。さらにこれを応用して、各自の運動能力を、実際の体力測定結果に基づいたバイオメカニクスの視点で評価する(履修者が多数の場合は、内容を一部変更。成績評価の方法と基準を参照)。授業は、各項目毎に作成したpptファイルに基づいて行う。

【授業項目】

1. スポーツバイオメカニクス総論
2. 筋系への工学的アプローチ
3. Hillの特性方程式
4. 生体筋特性を有するロボットアーム
5. 呼吸循環系への工学的アプローチ
6. Anaerobic Thresholdとその工学的アプローチ
7. 神経系への工学的アプローチ
8. 9. スポーツバイオメカニクス研究における方法論
 - ・生体信号処理
 - ・シミュレーション
 - ・運動駆動能力計測
10. 体力測定の工学的手法
11. 12. スポーツ実践の工学的応用
 - ・エネルギー代謝モデルによる運動解析
 - ・粘弾性モデルを用いた運動解析
13. 14. エネルギー代謝モデルによる長距離走の最適化
15. スポーツ工学へのいざない

【教科書】

特に指定しない。

【参考書】

「バイオメカニクス」東京大学出版他
「バイオメカニクスシリーズ」日本機械学会編

【成績の評価方法と評価項目】

各講義項目毎の5分間レポート(50点)、および履修者が50名前後の場合は、最終レポートとして各自のバイオメカニカルな体力評価に係るレポート(50点)を作成、この両者によって評価する。受講者数が50名以上の場合は、授業内容に係る課題レポートの作成を行う。

【留意事項】

受講者数の制限を設ける場合がある。
2学期経営情報システム工学専攻科目「スポーツ工学特論」の受講を希望する者は、このスポーツバイオメカニクスを履修しておくことが望ましい。

【担当教員】

加藤 幸夫

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟505室

【授業目的及び達成目標】

ギリシア思想のテクネーに端を発するテクノロジーと人間生活との関わりを歴史的に分析しながら、高度技術社会における人間存在のあり方を、人間形成という観点から考察する。

【授業キーワード】

テクノロジー、近代技術、人間形成、技術思想、技術と人間性

【授業内容及び授業方法】

講義形式とゼミ・討論形式を併用する。随時レポートを課す。

【授業項目】

1. テクノロジーとは何か
2. テクノロジーの歴史の変遷
3. 近代技術の成立
4. テクノロジーと科学
5. テクノロジーと人間存在
6. 現代テクノロジーの特性
7. 技術社会と人間形成
8. 技術と倫理
9. テクノロジーと技術者倫理
10. その他

【教科書】

テキストは特に指定しない。随時プリントおよび参考資料を配布する。

【参考書】

「哲学問題としてのテクノロジー」室井 尚 講談社選書
新岩波講座 哲学「技術 魔術 科学」大森荘蔵他
岩波講座 現代思想13「テクノロジーの思想」新田義弘

【成績の評価方法と評価項目】

原則的には期末レポートの成績及び平常点(出席状況・授業態度・学習意欲等)により評価する。場合によっては、小テストを実施することもありうる。実施時期については授業開始後に周知する。

【留意事項】

学部課程において、総合科目の「世界観と価値」「現代人間論」「科学技術と技術者倫理」のうち少なくとも1科目は履修していることが望ましい。

【担当教員】

稲垣 文雄

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟502室

【授業目的及び達成目標】

文化を異にする人間とのよりよい相互理解を成立させるために、言語が果たす役割を理解する。自分と相手の双方または一方が母語以外の言語で話すことの意味を認識し、無意識のうちに外国人と相互不理解を犯さない見識を養う。また、日本語を他の言語と並べて対象化し、その利点と欠点を科学的に評価することによって、母語の言語的特性に対する認識を深める。

【授業キーワード】

言語。異文化。国際理解。

【授業内容及び授業方法】

ある国家において公用語とはいかなるものなのかを確認した上で、言語と国家との関係を、世界の様々な国の事例を引いて考察し、母語以外の言語を話す(あるいは話さざるをえない)ということは、人間にとってどんな意味を持つのか、どんな事態が生じうるのかを考える。これらの検証を経た後、日本人は日本語に対してどのような姿勢を取ってきたかを歴史的に概観し、そうした認識、判断が正当であるかどうかを、日本語を言語として科学的に検討しながら考える。授業中に、課題について積極的に自分の意見を述べることを期待する。

【授業項目】

以下の項目を順次講義する
公用語とは何か
国家語と非国家語
少数民族の言語
ピジンが提起する問題
多言語社会
母語とアイデンティティー
言語と国家イデオロギー
日本語劣等語論
日本語ローマ字化論
日本語と英語の優劣比較
日本語の特性
日本語の国際度
日本人の姓名表記
外国語教育の文化的影響

【教科書】

参考資料としてプリントを配布。

【参考書】

『言語の思想』田中克彦 NHKブックス
『武器としてのことば』鈴木孝夫 新潮選書
『英語支配の構造』津田幸男 第三書館
『やさしい文章術』樋口裕一 中公新書 ラクレ

【成績の評価方法と評価項目】

期末レポートによって評価する。講義への積極的参加度は評価の重要なポイントとなる。コピー、剽窃編集等防止および文章記述力養成のため、レポートは手書き(本人直筆)で作成することとし、ワープロソフトによって作成されたものやコピーは受理しない。

【留意事項】

最初の時間に、授業の仕方と受講ルールを記したプリントを配って説明するので、それらに同意のうえで履修登録をしてください。
レポート作成にあたっては、自己記述部分と引用部分は明確に区別し、引用には出典を付記すること。
レポート作成基準違反により受理しないレポートの保管および返却の義務は負わない。
レポートには必ず所属専攻を記すこと。

【担当教員】

石岡 精三

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟507室

【授業目的及び達成目標】

論文等の科学文献の解釈・作成に必須となる単語の配列法(統語論)の基礎を修得する。特に、学生が最も不得意とする準動詞(To不定詞、動名詞、分詞)の意味・用法等を諸君がこれまで学んだ方法と異なる新たな見地から検討する。

【授業キーワード】

統語論(Syntax)、部分英作文、読解

【授業内容及び授業方法】

最初にそれぞれの学習項目を綿密に新たな観点から検討し、次に具体的な英文の解釈と部分作文の形で確認・拡張される。英文要素の意味自体を重視し、極力暗号解読のような日本語への翻訳は行われない。

【授業項目】

1. 単文構造(科学技術英語の特徴と名詞句の機能)(2回)
2. 形容詞要素の機能と Syntax(関係詞による拡張)(2回)
3. 関係詞省略の謎(1回)
4. 形容詞要素の機能と Syntax(分詞, To 不定詞による拡張)(2回)
5. 文頭要素の機能(1回)
6. 倒置(Inversion)と省略の詳細(1回)
7. with 絶対構文(with Absolute Construction)の構造(1回)
8. 分詞構文の解体(1回)
9. 外置化(dislocation)の詳細(1回)
10. 総合演習(部分英作文を忠心に)(3回)

【教科書】

随時配布されるプリントを用いる。

【参考書】

Oxford Advanced Learner's Dictionary, Oxford University Press.
Cambridge International Dictionary of English
T.D. ミントン(青木義巳訳): ここがおかしい日本人の英文法 II, 研究社

【成績の評価方法と評価項目】

最終レポート-50%, 小テスト(穴埋め問題)-30%, 随時課されるレポート-20%

【留意事項】

工学図書・論文だけでなく、一般的な学術図書・論文の英語の統語論に検討が加えられる。毎時間、上記の英英辞典の一方と和英辞典を持参するのが望ましい。英文構造の基本を理解している学生を対象とする授業である点に留意されたい。

【担当教員】

村山 康雄

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟504室

【授業目的及び達成目標】

1. 科学技術英語文章を読む能力を高める。2. 科学技術英語文章特有の構造、構成を理解する。3. 1, 2により科学技術英語文章を書く備えを養う。

【授業キーワード】

科学技術英語(テクニカル・イングリッシュ)、実用英語、論理構成

【授業内容及び授業方法】

下記の教科書を用い、1ページ程度の科学技術に関する文章(例えば、'Miniturization', 'Plastics', 'Why is Temperature Rising?', 'The Surface of the Sea', 'How to Remove Salt from Seawater', 'Ultrasonics', 'What is Technology', ')を読み、文法、語彙を学習すると共に、次の授業項目に述べてあるような科学技術英語文章の特徴を理解することに努める。

【授業項目】

1. 文法項目の理解(文の構成、名詞、時制、修飾語(句)、前置詞、懸垂構文等)
2. 1語には1つの意味
3. 1文には1つの概念
4. 1段落には1つの話題
5. 分析法
6. 対照法
7. 論理構成
8. 科学技術英語とその他の分野の英語との違い
9. 日本語と英語の発想の違い
10. 文連結、段落、文書全体の構成

【教科書】

科学技術英語の基礎 篠田義明 (南雲堂)

【参考書】

工業英語の正しい訳し方 篠田義明 (南雲堂)
テクニカル・イングリッシュ論理と展開 篠田義明 (南雲堂)
科学技術英語の実例と書き方 篠田義明 (南雲堂)

【成績の評価方法と評価項目】

宿題 20 パーセント、期末試験 80 パーセント
なお、期末試験は第 16 週に行う。

【留意事項】

この授業は演習科目である。積極的に参加することが重要である。かならず予習、宿題をしてくるように。

科学英語演習（作文）
Scientific English Seminar (Writing)

演習 1単位 1学期

【担当教員】

村山 康雄

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟504室

【授業目的及び達成目標】

科学技術に関する文章を作成する能力を身につけるための基本的な文法項目の理解とその知識を基にした英文を書く力を養うことを目的とする。基礎的な英文を完全に書く力がなければ科学のような正確に意味を伝えねばならない文、文章は作成できない。目標とするレベルは学生向けの百科事典で使われているレベルの英文を間違いなく書けるものである。具体的には最初の授業で文章を提示するのでそれを見て履修を判断して欲しい。

【授業キーワード】

科学、技術、論理構成、段落

【授業内容及び授業方法】

授業の形式は、(1) 毎回一つずつ特定の文法項目(文型、不定詞、関係代名詞等)を取り上げ、その項目の理解を確認する。練習問題は宿題とする。学生諸君の能力を見てどの項目を取り上げるか、どの程度まで学習するか判断する。(2) 同時に一般的な科学の題材(地球温暖化、エコロジー等)を扱った百科事典等の英文を日本語に翻訳したものを授業中に英文に直す(戻す)ことを試みる。その作業が終わり次第自分で元の英文と比較して自分が書いた英文の間違等に気づき、できるだけ元の文に近づける努力をし、英語を書く力を高めることを目標とする。翌週解説を行う。「英借文」という言葉もあるように吟味された文を真似ることにより英語を書く能力は高まる。下記の教科書を使用する。

【授業項目】

文法項目
受動態、仮定法、関係代名詞、時制の一致、句、節等

科学題材
エコロジー、地球温暖化、大気汚染等

【教科書】

Basic College Writing with 5 Sentence Patterns (センゲージラーニング株式会社)

【参考書】

科学時術英語の実例と書き方 篠田義明他 南堂雲
Notes on the Writing of Scientific English for Japanese Physicists (日本物理学会誌第 21 巻第 11 月号別刷)

【成績の評価方法と評価項目】

宿題 30 パーセント 期末試験 70 パーセント
なお、期末試験は第 16 週に行う。

【担当教員】

高橋 綾子

【教員室または連絡先】

物質・材料・経営情報棟506 内線9805

【授業目的及び達成目標】

1. 英語の発表表現を習得する
2. 英語プレゼンテーション力を育成する
3. 英文解釈をととして論理的判断力を育成する

【授業キーワード】

英文精読、論理的思考、発表・討議の技能、プレゼンテーション

【授業内容及び授業方法】

4技能(聞く、話す、読む、書く)を総合的に学習することを基本として、題材となる英語文献を精読し、要旨の把握を行う。さらに批評的に理解し、各自の意見や提案を論理的に構築する。(この部分の説明等は日本語で行う)翌週にその話題について、論理的に構築された意見や提案をもとにプレゼンテーションを行う。またそれに対する質疑応答、意見交換を行う。(これらの部分は全て英語で行う)

【授業項目】

- 第1週 授業概要説明
- 第2週 ビデオ分析「成功する英語プレゼンテーション」(何を伝えるか)
英語表現習得 反復練習 IntroductionとClosingを主眼においた演習
- 第3週 ビデオ分析「成功する英語プレゼンテーション」(どのように伝えるか)
Main Bodyでの特徴的な表現の習得とグラフの説明演習
- 第4週 機能英語習得演習 第1章 1～4、5、6、7、8、9～10、11
- 第5週 機能英語習得演習 第1章 12、13、14、15、16～17
- 第6週 機能英語習得演習 第2章 1、2、3
- 第7週 ビデオ分析「スピーチの準備とテクニック」、プレゼン技術の考察、ロールプレイ
- 第8週 プレゼン練習(指定課題) 小グループ(発表5分、質疑応答5分)
- 第9週 プレゼン練習(指定課題)小グループ(発表5分、質疑応答5分)
- 第10週 プレゼン練習(各自課題準備)小グループ(発表5分、質疑応答5分)
- 第11週 プレゼン練習(各自課題準備)小グループ(発表5分、質疑応答5分)
- 第12週 プレゼン予備
- 第13週 英文精読
- 第14週 英文精読
- 第15週 英文精読
- 第16週 総合演習

【教科書】

科学者のための英語口頭発表のしかた(朝倉書店)
教員が随時配布する英語文献

【成績の評価方法と評価項目】

評価方法 プレゼンテーション40% 講義中の質疑応答20% レポート40%

評価項目 1. 機能英語習得演習 2. 英語によるプレゼンテーション 3. 英文精読

【担当教員】

中村 和男

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟4階404室(E-mai: nakamura@kjs.nagaokaut.ac.jp)

【授業目的及び達成目標】

情報社会の進展にともない機器・システムにおける情報処理の高度化、知能化が図られてきているが、それらを真に人間に親和的なものにしてゆくためには、人間の認知的情報処理特性への適合性に配慮することが重要となっている。すなわち、従来の人間工学的アプローチに加え、知的な人間の特性についての知見を深め、それらを踏まえた製品・システム作りを行ってゆくための考え方を修得してもらう。

【授業キーワード】

認知特性, 人間の情報処理, コミュニケーション, 感性, モデル, 認知的インタフェース, 支援システム, ヒューマンエラー

【授業内容及び授業方法】

人間の認知特性の概観から始め、それらを踏まえた機器、システムへ認知的システムアプローチを具体的な設計、評価問題、事故事例などを通して学習してもらう。適宜プリントを配布するとともに、ビデオ教材などを活用して進める。

【授業項目】

1. 認知特性と人間工学
2. 人間の情報処理特性(知覚、認識、理解、学習、思考、判断)
3. 人間のコミュニケーション特性(言語/非言語、対人認知)
4. ヒューマンインタフェース(使いやすさ、分かりやすさ、おもしろさ)
5. 感性工学(感性情報検索、デザイン支援、行動調節)
6. システムにおける認知的行動モデル(ユーザの認知過程、メンタルモデル、ヒューマンエラー)
7. 知的支援システムに向けて
8. まとめ

【教科書】

なし。ただし、プリントを配布する。

【参考書】

- P.H.リンゼイ他著「情報処理心理学入門」(サイエンス社)
D.L.Medin & B.H.Ross "Cognitive Psychology (Second Edition)" (Harcourt Brace College Publishers)
海保博之他著「認知的インタフェース」(新曜社)
J.Rasmussen "Information Processing and Human-Machine Interaction" (North-Holland) (インタフェースの認知工学、啓学出版)
J.Rasmussen et. al "Cognitive Systems Engineering" (John Wiley & Sons)
R.J.Sternberg "Cognitive Psychology" (Harcourt Brace College Publishers)
竹村和久編著、中村和男他著「社会心理学の新しいかたち」(誠信書房)

【成績の評価方法と評価項目】

通常レポート	40%
期末レポート(プレゼンテーションを含む)	50%
授業態度(受講状況や質疑の態度)	10%

【担当教員】

MARASINGHE CHANDRAJITH ASHUBODA

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟307(内線9367, Email: ashu@kjs.nagaokaut.ac.jp)

【授業目的及び達成目標】

This course aims to provide students both a theoretical and a practical base in kansei engineering. Kansei engineering is the trans-disciplinary engineering that extends over the humanities, social science and natural science.

本講義の目的は感性工学の理論・実践を学習することである。感性工学は人文、社会、科学、自然科学にわたって拡張される学際的な学問である。

【授業キーワード】

Kansei Engineering, Robotics, Semantic Differential Analysis, Product Development

【授業内容及び授業方法】

Interactive learning with individual presentations and case studies to acquire essentials of Kansei Engineering

感性工学の本質を学習するためにプレゼンテーション、ケーススタディによる対話型学習

【授業項目】

- 1.What is Kansei Engineering?(感性工学とは)
- 2.Historical Prospective of Kansei Engineering(感性工学の歴史と将来)
- 3.Basic Human Emotions(人間灌頂の基礎)
- 4.Kansei Information processing(感性の情報過程)
- 5.Kansei and New Product Development(感性と新製品開発)
- 6.Kansei and Robotics(感性とロボティクス)
- 7.Semantic Differential Analysis(セマンティック差分解析)
- 8.Principal Component Analysis(成分析の原理)
- 9.Case Studies of Kansei Engineering(感性工学のケーススタディ)

【参考書】

Proceedings of the First and Second International Conference on Kansei Engineering and Intelligent Systems (KEIS'06)

Journal of Japan Society of Kansei Engineering -JSKE (Japanese), Journal of Kansei Engineering International (KEI), www.jske.org

【成績の評価方法と評価項目】

Attendance 20%

Individual Presentation 40%

Final Report 40%

【留意事項】

※平成元号の奇数年度に開講される科目である。

【参照ホームページアドレス】

<http://kjs.nagaokaut.ac.jp/ashu/ke/ke.html>

Kansei Engineering (KE)

【担当教員】

三宅 仁・原 利昭

【教員室または連絡先】

体育・保健センター107室(内線9822 E-mail:miyake@melabo.nagaokaut.ac.jp)

【授業目的及び達成目標】

授業目的:ライフサイエンスのうち、特に医学・医療・福祉に目を向けたproblem-orientedな学問分野である
医用福祉工学について幅広い知識を獲得する。

達成目標:医用福祉工学分野での幅広い問題やアプローチ方法および、年々拡大・移動している関心領域
についての基礎的知識の獲得とその応用および最新情報の理解を目的とする。

【授業キーワード】

ライフサイエンス、バイオエンジニアリング、医学・医療、福祉、福祉工学、ME、人工臓器

【授業内容及び授業方法】

授業内容:医学、医用福祉工学の現状、方法論、各論

授業方法:講義を中心とするが、各自の学習に期待する。

原 利昭 先生の講義はバイオエンジニアリングのうちのバイオメカニクスおよび福祉工学となる予定。

【授業項目】

Introduction

§ 1総論

(1)生体の特性

(2)方法論

(3)ME診断機器A

(4)ME診断機器B

(5)ME治療機器A

(6)ME治療機器B

§ 2各論

(1)医用材料

(2)人工臓器

(3)バイオメカニクス

(4)人工心臓

(5)医用レーザー

(6)福祉工学

(7)医療情報学

(8)バイオマテリアル

【教科書】

別途指示する。

【参考書】

藤正他著「人工臓器工学」講談社、藤正他著「マイクロマシン」講談社、日本機会学会編「生物と機械」共立出版 など

【成績の評価方法と評価項目】

評価方法:出席(20%)および各自の学習成果の発表(80%)

評価項目:基礎的知識の獲得(50%)+応用能力(50%)

【参照ホームページアドレス】

<http://www.melabq.nagaokaut.ac.jp/LEC>

【担当教員】

福村 好美

【教員室または連絡先】

事務2号棟210室

【授業目的及び達成目標】

基本的なナレッジマネジメントの考え方を理解し、ナレッジマネジメントの情報技術、知識共有と協働に対する積極的な態度を養う。

【授業内容及び授業方法】

講義, および課題に対する討論発表を行う。

【授業項目】

1. 知識の定義
2. 知識市場
3. 組織的知識創造
4. 知識創造のための組織論
5. 関連技術
6. 事例研究
7. 発表・討論

【参考書】

授業の中で提示する

【成績の評価方法と評価項目】

学期末試験(70%)とレポート・受講状況(30%)により総合的に評価する

【担当教員】

加藤 幸夫

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟505室

【授業目的及び達成目標】

現代社会の構造とそれが抱える諸問題を浮き彫りにし、その問題解決のための糸口を倫理的視点から分析し、国際社会に生きる現代人の生き方を考察・探求することが課題である。

【授業キーワード】

現代社会、高度技術社会、倫理思想、企業倫理、技術者倫理

【授業内容及び授業方法】

講義形式とゼミ・討論形式を併用する。随時レポートを課す。

【授業項目】

1. 現代社会の構造と分析
2. 現代社会の倫理的諸問題
3. 倫理思想の現代的役割
4. 高度技術社会と倫理思想
5. 技術者倫理の諸相
6. 環境破壊と生命倫理
7. 国際平和と倫理思想
8. その他

【教科書】

テキストは特に指定しない。随時プリントおよび参考資料を配布する。

【参考書】

- 「現代倫理学の課題」片木 清・堀田 彰他著 法律文化社
「地球環境と倫理学」泉谷周三郎・大久保正健著 木鐸社
「生命倫理と現代社会」加茂直樹著 世界思想社
「技術倫理」C・ウイットベック(札幌 順・飯野弘之訳)みすず書房

【成績の評価方法と評価項目】

原則として、小テスト(40%)・レポート(30%)及び授業参画姿勢・平常点(30%)の成績により評価する。テストの実施時期については授業開始後に周知する。

【留意事項】

学部課程において、総合科目の「世界観と価値」「現代人間論」のどちらかは履修していることが望ましい。

A History of Comparative Cultures

【担当教員】

稲垣 文雄

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟502室

【授業目的及び達成目標】

日本文化と西欧文化を、その成立・発展過程に沿って比較対照することによって、彼我の異質性と共通性を認識する。日本文化の特性を知ることによって、国際社会における自己の文化的アイデンティティを確認する。口頭および記述による論理的発表力を養成する。

【授業キーワード】

比較文化史。西欧文化。日本文化。

【授業内容及び授業方法】

西欧と日本の技術、科学、芸術の進展・発展過程の流れのなかで彼我の文化的対照を明示する幾つかのテーマをとりあげて、教師の概説と問題提起を受けて受講者と共に討論したい。西欧と日本の、建築、彫刻、絵画、音楽等芸術の諸分野を比較・対照しながら歴史的に概観し、技術・科学の発展と芸術とはいかなる関係にあるのかを考える。社会と芸術および芸術家はどのように関わっているのか。社会的特性が、文化形成にどのような影響を与えたかを考察し、文化は社会の反映であることを認識する。逆にいえば、文化に対する考察を深めることによって、その文化の担い手である人間に通用のメンタリティーや物事の認識の型が見えてくる。さらに、科学的思考とは何かを考えながら、ルネッサンス以降の芸術と近代科学の進歩をたどることによって、近代科学はなぜ西欧で誕生したのかを考える。

【授業項目】

以下の項目を順次講義する

1. 人為と自然、cultureとは何か
2. 文明と自然環境
3. 技術と芸術
4. 西欧と日本の芸術概観(建築・造形芸術)
5. 西欧と日本の芸術概観(絵画)
6. 西欧と日本の芸術概観(音楽)
7. 芸術と社会
8. 芸術とパトロネージュ、「芸術家」の誕生
9. 技術の進歩と芸術の大衆化
10. 日本的美意識の形成
11. 近代科学と西欧文化
12. ダーウィニズムとキリスト教
13. 神の時間と科学の時間
14. 科学的思考とキリスト教の神
15. ルネッサンス、近代科学の成立

【教科書】

必要に応じて参考資料を配付。

【参考書】

『やさしい文章術』樋口裕一 中公新書 ラクレ

【成績の評価方法と評価項目】

期末レポートによって評価する。講義への積極的参加度は評価の重要なポイントとなる。コピー、剽窃編集等防止および文章記述力養成のため、レポートは手書き(本人直筆)で作成することとし、ワープロソフトによって作成されたものやコピーは受理しない。

【留意事項】

提起された問題について、積極的に発言することが望まれる。レポート作成にあたっては、自己記述部分と引用部分とを明確に区別し、引用には出典を付すこと。レポート作成基準違反のため受理しないレポートの保管および返却の義務は負わない。レポートには必ず所属専攻を記すこと。

【担当教員】

若林 敦

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟503室

【授業目的及び達成目標】

現代日本の文学作品（ノンフィクションを含む）を読み、そこに描かれた諸問題を現代社会と関連づけて考察する。作品から読み取った内容をもとに、現代社会とそこで生きる人間について考えを深めていくことが目標である。

【授業キーワード】

現代日本文学、文学作品の解釈と主題、現代社会

【授業内容及び授業方法】

教員の講義及び学生の報告と全員の討論によって進める。作家と作品に関する資料は教員があらかじめ配付する。受講する学生は以下のことを行う。

1. 「授業項目」で示す作品のうち報告担当を一つ、発言担当を一つ決める。
2. 報告担当者は、その作品についての講義の後で次の内容で報告する。「A. その作品は何を描いたものか（どういう物語か）。B. その作品の提示する主題は何か。C. その作品のどこが面白かった（興味深かった）か。それはどうしてか。D. その作品の内容についてどんな感想を持ったか。」報告にあたっては、内容のレジュメ（要約）あるいは内容を文章化したものを、出席者全員に配る。
3. この報告のあと、C.を中心に発言担当者と報告者による討論を行う。その内容をふまえ、それ以外の受講生にも発言を求める。発言は、作品の具体的内容に即して行うこと。
4. この討論を受けて、報告担当者はあらかじめ「○○（作者名）『××』（作品名）と現代社会」という題でレポート（1600字以上）をまとめ、学期末に提出する。

【授業項目】

はじめに（1回）

授業内容・方法の説明。取り上げる作家・作品についてのガイド。

1. 柳田邦男『犠牲（サクリファイス） わが息子・脳死の11日』1995年、（文春文庫）（3回）
 2. 南木佳士『阿弥陀堂だより』1995年、（文春文庫）（3回）
 3. 村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』2000年、（新潮文庫）（3回）
 4. 鷺沢萌『さいはての二人』1999年、（角川文庫）（2回）
 5. 川上弘美『センセイの鞆』2001年、（文春文庫）（2回）
- 報告・討論の予備日（1回）

【教科書】

用いない。

【参考書】

授業の中で示す。

【成績の評価方法と評価項目】

1. 評価方法

授業での報告・発言内容と学期末レポートによる。成績評価の割合はそれぞれ50%。

2. 評価項目

- 1) 作品から読み取った内容をもとに、自分の考えをまとめることができた。
- 2) 授業での討論を受けて、自分の考えを深めることができた。
- 3) 他の人の意見に対し、根拠のある意見を述べることができた。

【留意事項】

1. 「授業項目」に示した作家・作品を、他の作家・作品（文庫化されたもの）に変更することがある。最初の授業時に確定した作品リストを示す。
2. 受講生は15回の授業すべてに出席すること（出席をとる）。遅刻・欠席の多い学生には受講をとりやめてもらう。
3. 受講生は、報告・討論の授業時までそれぞれの作品を読了しておくこと。報告・討論の授業時には読了した本を持参すること。
4. 報告・討論の実質化のため、受講人数は20名程度に制限する。履修希望者が多数の場合は、第一時間目の授業に出席した学生を対象として、人数を絞る。その方法は授業時に説明する。
5. 外国人留学生は、日本語力の不足により作品を読めず、報告・討論も困難な場合が多い。そうなると、単位の取得は難しい。

【担当教員】

村上 直久

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟309号室

【授業目的及び達成目標】

東西冷戦の終焉を受けて1990年代に活発になってきたグローバリゼーションの動きとその背景にある様々な問題および各国際機関の対応などについて学習し、国際情勢への感度を高める

【授業キーワード】

グローバリゼーション、WTO、IMF、国連、

【授業内容及び授業方法】

講義を主体とするが、学生による発表・討論も交える。視聴覚教材も使用する。

【授業項目】

- 1 グローバリゼーションの光と影
- 2 国連－安全保障理事会は機能しているか
- 3 国際金融とIMF－世界銀行体制、米国発の金融危機
- 4 WTO下の自由貿易体制、ドーハ・ラウンドのゆくえ
- 5 中国のWTO加盟
- 6 主要国首脳会議(サミット)の役割、脚光を浴びるG20
- 7 OPECの栄光と影響力減退、エネルギー問題
- 8 地球環境問題－温暖化とポスト京都議定書
- 9 人口爆発問題
- 10 難民問題
- 11 貧困と開発
- 12 食の安全－グローバル化した食品供給体制
- 13 国境を越える企業M&A
- 14 インターネット・ガバナンスをめぐる攻防
- 15 まとめ

【教科書】

村上直久『国際情勢テキストブック』2005, (日本経済評論社)

【参考書】

教科書中のリーディング・リスト参照

【成績の評価方法と評価項目】

期末レポート(60%)、授業内発表(40%)

【留意事項】

新聞の国際面をよく読むこと

【担当教員】

松井 志菜子 (MATSUI Shinako)

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟305室

【授業目的及び達成目標】

現代社会は人、物、サービス、資金が移動し、世界経済がダイナミックに流動している。高速情報通信網の発達により国境を越える取引紛争や知的財産権の輻輳も多い。また地球環境の自然破壊、汚染問題は深刻である。地球規模のリストラクチャーが行われている昨今、自然環境、世界各国、各地域の異なる文化や歴史を踏まえ、国際取引における法的問題解決、法の役割を考えていくのが授業の目的である。

【授業キーワード】

国際私法、当事者自治の原則、準拠法、裁判権、管轄権

【授業内容及び授業方法】

授業内容は授業項目に沿った講義を中心に行う。国際取引の核となる国際私法の基礎理論を固める。国際売買契約、国際物品運送、国際技術移転、国際投資、国際商事仲裁などをわかりやすく説明する。国際機関や条約にも触れる。授業方法は毎回レポート提出を課す。

【授業項目】

- 1 国際私法とは何か
- 2 国際私法の基本テーゼ
- 3 国際契約
- 4 準拠法
- 5 性質決定
- 6 反致
- 7 公序
- 8 外国法の適用
- 9 適応問題
- 10 国際的企業活動

【教科書】

未定。

【参考書】

適宜、紹介する。

【成績の評価方法と評価項目】

課題レポート(日本語、外国語提出可能)(40%)、発表(30%)
授業態度、議論や討論参加状況、積極性、問題意識、課題への取組姿勢などを総合評価(30%)。
適宜、テストを行う。

【留意事項】

※平成元号の偶数年度に開講される科目である。

【担当教員】

李志東・伊藤 浩吉

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟306室(李)

【授業目的及び達成目標】

日本におけるエネルギー需給・環境保全・経済発展の相互依存関係を計量的に解明し、持続可能な発展の諸条件について考察する。日本のエネルギー・環境問題に関する理解を深めることを目標とする。

【授業キーワード】

日本、エネルギー、資源制約、環境制約、エネルギー需給バランス、エネルギー需給モデル、環境保護システムとエネルギー環境政策、持続可能な発展

【授業内容及び授業方法】

講義資料を配布し、講義と討論併用方式で進める。

【授業項目】

1. エネルギー需給バランス表の見方(2回)
2. エネルギー消費と所得、価格との関係(1回)
3. 日本におけるエネルギー需給の概要と安全保障問題、環境問題(2回)
4. 部門別エネルギー消費の要因分析(2.5回)
5. 日本における中長期エネルギー需給見通しと政策課題(2.5回)
6. エネルギー分野における日本と中国の共通課題と相互協力(5回)

【教科書】

追って指示する。

【参考書】

日本エネルギー経済研究所エネルギー計量分析センター 編「エネルギー・経済統計要覧(最新版)」省エネルギーセンター、同「エネルギー・経済データの読み方入門」

【成績の評価方法と評価項目】

出席状況や質疑応答など平常点(30%)と期末レポート(70%)により評価する。

【留意事項】

日常的に、エネルギー問題について関心を持ってほしい。

【担当教員】

Valerie. McGown (ヴァレリー マクガウン)

【授業目的及び達成目標】

The aim of the course is to give students a basic understanding of the process of economic development in postwar Japan, the forces which effected that process and the consequences of that process domestically and internationally.

【授業キーワード】

Japanese economy, postwar economic development, Japanese labour market, Japanese employment practices.

【授業内容及び授業方法】

SYLLABUS

The course will cover the following topics:

- 1.Preconditions for growth in the Tokugawa period
- 2.Meiji and the prewar economy
- 3.Wartime economy and postwar recovery
- 4.High economic growth (HEG)
- 5.Changes in industrial structure and the labour market
- 6.Dual economy, subcontracting and small-medium industry
- 7.“Japan, Inc.”: the role of government in economic development
- 8.Japanese employment system and the labour market
- 9.Changes in the labour market and employment practices post-HEG
- 10.Energy, raw materials and food
- 11.Japanese trade and the world economy
- 12.Overseas investment and aid
- 13.Trade friction
- 14.Plaza Accord, “Bubble Economy” and the “Lost Decade”
- 15.REVIEW & DISCUSSION: Japan’s future role in the world economy

【教科書】

TEXTBOOKS

Yoshikawa, Hiroshi (2002) Japan’s Lost Decade. LCTB International Library Selection No.11.
よしかわひろし(1999)『転換期の日本経済』岩波書店

【参考書】

Also recommended:

橋本寿朗・長谷川信・宮島英昭(1998)『現代日本経済』有斐閣アルマ
Alexander, Arthur G. (2002) In the Shadow of the Miracle. Lexington Books.
Copies of a range of reference materials will be made available to students.

【成績の評価方法と評価項目】

ASSESSMENT

Students will be required to research and write one long paper of about 15 pages. Papers may be written in Japanese or English.

The long paper will constitute 100% of the final mark.

In terms of skills, students will be expected to demonstrate an ability to;

- research and analyze relevant material
- present a logical argument and conclusion
- provide material of sufficient quantity and quality to support the argument
- organize the material to support the argument and conclusion

【留意事項】

No prerequisites.

This course will be conducted entirely in English.

However, students may use Japanese reference materials and submit written assignments in Japanese.

Theories of Industrial Organization**【担当教員】**

Valerie. McGown (ヴァレリー マクガウン)

【授業目的及び達成目標】

The aim of the course is twofold: 1) to provide students with an introduction to the ideas and concepts of organization theory as they relate to corporate management and 2) to examine and compare the literature, especially the English literature, on Japanese management.

【授業キーワード】

organization theory, open systems, management systems, Japanese management, Toyota Production System, lean production.

【授業内容及び授業方法】

SYLLABUS

The course will cover the following topics:

- 1.Introduction to industrial organization
- 2.Organizations in industrial society: Weber and bureaucracy
- 3.Evolution of theories of industrial organization and management
- 4.Technology and organization I
- 5.Technology and organization II
- 6.The management system in manufacturing organizations
- 7.Japanese management and employment practices
- 8.Japanese production systems and management
- 9.TQC and Japanese management
- 10.Organizations as social systems
- 11.Work groups, teams and QC circles
- 12.Decision making and participation in management
- 13.Organizations, management and information technology
- 14.Organization and environment
- 15.Organizational change

【教科書】

TEXTBOOK

Etzioni, A. Modern Organizations.

Copies of a range of reference materials will be made available to students.

【成績の評価方法と評価項目】

ASSESSMENT

Students will be required to research and write one long paper of about 15 pages. Papers may be written in Japanese or English.

The long paper will constitute 100% of the final mark.

In terms of skills, students will be expected to demonstrate an ability to;

- research and analyze relevant material
- present a logical argument and conclusion
- provide material of sufficient quantity and quality to support the argument
- organize the material to support the argument and conclusion

【留意事項】

No prerequisites.

Classes will be conducted entirely in English.

However, students may use Japanese reference materials and submit written assignments in Japanese

【担当教員】

三上 喜貴 (MIKAMI Yoshiki) ・Suda Aruna Rohra (須田 アルナ ローラ)

【教員室または連絡先】

Yoshiki Mikami, Sogo Kenkyu Bldg. Room 605. Phone:ext.9355
(総合研究棟605室、内線9355)
Suda Aruna Rohra

【授業目的及び達成目標】

The course is designed to give an overview of Japanese industrial experience after Meiji Restoration. Both the role of techno-entrepreneurs and government is focused. In the latter part of the course, implications of the current global regime on trade, technology and intellectual properties to national development are examined. The underlying theme of the course is "Technology and Development in a Global Context".

【授業キーワード】

Japanese Industrial Development History, technology transfer, WTO, global standard, IPRs, ICT, JICA

【授業内容及び授業方法】

Lectures and class discussions.

【授業項目】

In the first part, the history of Japanese industrial development is reviewed. It is a good opportunity for non-Japanese students to get a bird's-eye view of Japanese industrial development history over the 150 years from the Meiji-Restoration (1868) up to the present.

- (1) Technology in pre-modern Japan
- (2) Meiji Restoration
- (3) Rich Nation, Strong Army
- (4) Between Two World Wars
- (5) Post War Reconstruction and Trade Liberalization
- (6) Response to New Economic Environment
- (7) Conflicts with Trade Partners
- (8) Challenges to Japanese Technology Management

In the second part, the impact of the Uruguay Round (UR) multilateral trade negotiations is examined. UR was not just trade-talks. It has changed the technology world as well. Impacts of trade liberalization, and the evolution of global standards and the global intellectual property rights protection systems are focused on.

A special lecture will be given by guest lecturer from JICA, on the Japanese technical assistance program.

【参考書】

Handouts will be delivered in the class.

【成績の評価方法と評価項目】

Students will be graded by written reports (reports in Japanese will be accepted).

【留意事項】

The course is mainly targeted to foreign graduate students, but Japanese students are also welcomed. Lectures are delivered in English.

【担当教員】

松井 志菜子

【教員室または連絡先】

物質・材料 経営情報1号棟305室

【授業目的及び達成目標】

IT(情報技術)、BT(バイオテクノロジー)、NT(ナノテクノロジー)、ET(環境技術)など先端科学技術の急速な発展に伴い、知的財産権の保護と活用が現代社会の重要課題である。国境を超える知的財産権に係わる国際機関の活動や条約、国内立法の動きが激しい。この授業は技術科学の研究者による発明やノウハウなどの知的財産権の保護とその活用に必要な法の基礎知識を体系的に習得することを目的とする。また専門知識を有する技術者、科学者の立場から知的財産立国への提言を考えていく。

【授業キーワード】

知的財産立国、特許権、職務発明

【授業内容及び授業方法】

講義、特許法を中心に講義する。知的財産紛争の判例分析の発表。議論・討論。

【授業項目】

- 1 知的財産とは
- 2 産業財産権
- 3 特許権
- 4 実用新案権
- 5 意匠権
- 6 商標権
- 7 著作権

【教科書】

教科書は配布する。

【参考書】

適宜、紹介する

【成績の評価方法と評価項目】

授業態度、議論や討論参加状況、積極性、問題意識、課題研究への取組姿勢などを総合評価(20%)
課題レポート(日本語、外国語提出可能)(20%)ゼミ発表(30%)判例研究(30%)

【留意事項】

偶数年度開講。

【担当教員】

松川 文彦・市川 類

【教員室または連絡先】

総合研究棟604室

【授業目的及び達成目標】

日本経済が低迷している中で起業が注目されている。起業の中でもいわゆるベンチャーと呼ばれる新規事業にチャレンジする者の役割は重要である。そこで、ベンチャーとは何か、その条件、課題等について知見を深める。これにより、技術を企業や産業活動の中で生かす管理能力を養う。

【授業キーワード】

創業、起業、イノベーション

【授業内容及び授業方法】

講義形式を主とするが、それとともにディスカッションも取り入れる。

【授業項目】

1. ベンチャーとは何か
2. イノベーション
3. イノベーションと需要の好循環
4. 創業・起業
5. ベンチャー企業と経営
6. 経営戦略
7. 技術経営
8. リーダーシップ
9. ベンチャー企業と資金
10. リスク管理
11. 変革
12. 大学発ベンチャー
13. マーケティング
14. 経済のグローバル化
15. ベンチャー起業を支える政策

【教科書】

特に定めないが必要に応じて指定

【参考書】

必要に応じてその都度紹介

【成績の評価方法と評価項目】

レポート100%

【参照ホームページアドレス】

松川教授 (<http://kjs.nagaokaut.ac.jp/matsukawa/lec/>), 市川教授 (<http://kjs.nagaokaut.ac.jp/ichikawa/lec/>)

【担当教員】

末永 敏和(龍谷大学法科大学院教授・弁護士)

【教員室または連絡先】

非常勤講師(t-suenaga@yglpc.com)

【授業目的及び達成目標】

コンプライアンスとは、「法令遵守」のことをいう。いま社会から企業に対してコンプライアンスということが厳しく問われている。コンプライアンスに配慮しない企業は、業績不振となり、ついには倒産に至ることさえある。さらに関係者は刑罰を受けたり、損害賠償責任を負うおそれもある。本授業は、企業関係者として、どのような法令に特に配慮すべきか、その法令は何を要求しているかを、具体例を通して学び、実社会に出たときに役立つ知識を身に付けることを目標とする。

【授業キーワード】

コーポレート・ガバナンス、コンプライアンス、粉飾決算、インサイダー取引、総会屋への利益供与、談合、公害、企業の社会的責任、製造物責任

【授業内容及び授業方法】

まず、企業の仕組みについて説明したうえで、コンプライアンス体制の構築・運営など企業内制度を学び(授業時間の約半分)、そして企業活動において違反しやすいいくつかの代表的な法令について、概要と問題点を具体的に解説する。新聞やビデオなどの資料をもとに討論するなど、双方向の授業も一部、取り入れた。

【授業項目】

- 1 企業の法形態としての会社の仕組みと機能
- 2 コーポレート・ガバナンス(企業統治)
- 3 コンプライアンス体制の構築と運営(内部統制など)
- 4 粉飾決算
- 5 総会屋への利益供与
- 6 インサイダー・トレーディング(内部者取引)
- 7 談合
- 8 公害
- 9 製造物責任

【教科書】

末永敏和編著『テキストブック 会社法』(中央経済社)

【参考書】

授業において適宜指示する。

【成績の評価方法と評価項目】

基本的には最終テストによるが、授業への出席、授業中の小レポート、授業に臨む態度、発言をも考慮する。

【留意事項】

法律というあまりなじみのない分野でかつ授業は集中講義で行うので、可能な限り全部出席するのが望ましい。

【担当教員】

志田 敬介 (SHIDA Keisuke)

【教員室または連絡先】

総合研究棟 504室 (E-mail:shida@kjs.nagaokaut.ac.jp)

【授業目的及び達成目標】

実際の企業における問題に関して、システムの設計、管理および改善の問題を解決する過程について学ぶ。具体的には、組織、生産、開発における問題へ取り組み、問題の構造化とアプローチの選択、問題解決の方針(価値的)側面、問題解決の技術的側面、問題解決における人間に関する配慮、問題解決における組織上の配慮のテーマで講義する。各回の講義内容は、実例と、それに対する解説としての哲学・評論・技術論の構成になっている。

【授業キーワード】

プロジェクト管理、管理問題、改善問題、リスク管理、チーム

【授業内容及び授業方法】

授業内容は、毎回担当者が与えられたテーマについて調査発表し、それに関連する内容について講義する。

【授業項目】

1. 問題解決の問題
2. 問題解決のアプローチ的側面
3. 問題解決の価値的側面
4. 問題解決の技術的側面
5. 問題解決の人間的側面
6. 問題解決の組織的側面

【教科書】

川瀬武志著「IE問題の基礎」(日刊工業新聞社)

【成績の評価方法と評価項目】

毎回の講義での発表と討論、及び演習課題によって評価する。

Total Quality Management: Theory and Practice

【担当教員】

Valerie. McGown (ヴァレリー マクガウン)

【授業目的及び達成目標】

The aim of the course is to provide students with an introduction to the ideas, concepts and practice of quality control/ quality management as developed in Japan and in the West.

【授業キーワード】

TQC, TQM, international standards, quality tools, problem solving.

【授業内容及び授業方法】

SYLLABUS

The course will cover the following topics:

- 1.Introduction: TQC/TQM in Japan and in the West
- 2.History and development of QC/TQC in Japan
- 3.History and role of QC circles in Japan
- 4.Key elements of TQC in Japan
- 5.Development of TQM in the West: quality and international competitiveness
- 6.International standards: ISO9000
- 7.International standards: QS9000/TS16949
- 8.REVIEW AND DISCUSSION
- 9.Tools of TQC
- 10.Policy deployment
- 11.Problem solving techniques
- 12.Six sigma: the Americanization of TQC
- 13.QC circles, work groups, and teams
- 14.TQC/TQM, Management and Organization
- 15.21st Century: future of quality

【教科書】

TEXTBOOK

To be advised.

【成績の評価方法と評価項目】

ASSESSMENT

Students will be required to research and write a long paper examining one of the major issues related to the theory or practice of quality management. The long paper should be about 15 pages.

Students will also be required to write a short report of about 3-5 pages examining one of the basic tools or key concepts of quality management.

The long paper will account for 80% and the short report for 20% of the final mark.

The long paper and the short report may use English or Japanese reference materials and be written in English or Japanese.

In terms of skills, students will be expected to demonstrate an ability to;

- explain key concepts
- research and analyze relevant material
- present a logical argument and conclusion
- provide material of sufficient quantity and quality to support the argument
- organize the material to support the argument and conclusion

【留意事項】

No prerequisites.

This course will be conducted entirely in English.

However, students may use Japanese reference materials and submit written assignments in Japanese.

【担当教員】

青木 久美子

【教員室または連絡先】

非常勤講師

Eラーニング研究実践センター、または、email: kaoki@ouj.ac.jp

【授業目的及び達成目標】

人間の学びがどのようにして起こるのかの学習理論を論じ、そういった学習理論を基にした教育実践、特に情報コミュニケーション技術 (ICT) を活用した学習・教育実践について学ぶ。教育実践を効果的に行うための学習環境についての理解を深め、効果的な学習のための学習教材開発の基本的概念を学ぶ。最後に、様々な事例を通して、効果的な学習システムとは何かを考察し、学生自らの意見が主張できるようにする。

【授業キーワード】

学習理論、構成主義、認知学、授業実践、探求型学習、PBL、協調学習、CSCW、eラーニング、LMS、教育メディア、教材開発、インストラクショナルデザイン、ラーニングデザイン

【授業内容及び授業方法】

授業項目に関して講義を行うとともに、課題に関するディスカッション、学生によるプレゼン、及びハンズオンの演習を行う。

【授業項目】

第1部: 学習理論

- ・ 学習の考え方
- ・ 学習理論の基礎
- ・ 知識の種類
- ・ 学習科学の基本理念
- ・ 認知科学
- ・ 構成主義

第2部: 授業実践

- ・ 学習とスキーマ
- ・ 認知負荷理論
- ・ 学習者中心デザイン
- ・ 教育目標の分類学
- ・ 授業形態

第3部: 学習環境

- ・ ラーニングスペース
- ・ 学習科学とICT
- ・ Eラーニング
- ・ LMS, VLE
- ・ OER (オープンな学習資源)

第4部: 学習教材の開発

- ・ インストラクショナルデザイン
- ・ 認知的情報処理
- ・ ADDIEモデル
- ・ ARCSモデル
- ・ 学習評価

第5部: 学習活動の設計

- ・ ラーニングデザイン
- ・ ラーニングデザインによる教材作成
- ・ 学習活動
- ・ ラーニングデザインの標準化

【教科書】

特になし。

【参考書】

Sawyer, R.K. Ed. (2005). The Cambridge Handbook of the Learning Sciences. Cambridge University Press

Clark, R.C. & Mayer, R.E. (2007). e-Learning and the Science of Instruction: Proven Guidelines for Consumers and Designers of Multimedia Learning. Pfeiffer.

【成績の評価方法と評価項目】

毎回課題を課し、形成的評価を行うとともに、期末レポートを課し、総括的評価を行う。

【留意事項】

特になし

【参照ホームページアドレス】

なし

【担当教員】

福村 好美

【教員室または連絡先】

事務2号棟210室

【授業目的及び達成目標】

基本的なe-learningの考え方を理解し、e-learningの情報技術、e-learningで自学できる態度を身につける。

【授業内容及び授業方法】

講義および発表討論を行う

【授業項目】

1. eラーニングの動向
2. 学習科学
3. eラーニングのアーキテクチャ
4. eラーニングのマネジメント
5. インストラクショナル・デザイン
6. eラーニングの評価
7. 事例研究
8. 発表・討論

【教科書】

なし

【参考書】

授業の中で提示する

【成績の評価方法と評価項目】

学期末試験(70%)とレポート・受講状況(30%)により総合的に評価する

【留意事項】

※平成年号の奇数年度に開講する。

【担当教員】

吉井 剛

【教員室または連絡先】

非常勤講師

吉井国際特許事務所

長岡市城内町3-5-8 TEL0258-33-1069, fax0258-32-2508

takeshi@yoshii-ipo.com

info@yoshii-ipo.com

【授業目的及び達成目標】

今日、知的財産の重要性は一々述べるまでもない。本講座においては、主として、知的財産の中で最も本学学生に将来、必要となる特許法を中心に、その基礎知識を習得させ、更に進んで特許明細書の書き方など、実践的な知識・技能の習得までを予定している。

本講義における具体的な達成目標は以下の通りである。

- 1 知的財産権(特に特許権)に関する最低限の法的知識の習得
- 2 特許明細書を読むこと、特許明細書を書くことの知識・技能の習得
- 3 知的財産権をめぐる紛争の対処・検討ができる能力の習得
- 4 外国特許についての基礎知識の習得

【授業キーワード】

知的財産、特許、特許権侵害、特許明細書、意匠、商標、実用新案、著作権、不正競争防止法

【授業内容及び授業方法】

- 1 講義
- 2 実例をもとにした演習
- 3 毎回配布のレジュメ及び資料をもとに適宜参考書を併用
- 4 設備は原則、黒板のみ使用
但し、受講生の数及び教室の広さにより適宜パワーポイント使用
- 5 グループ分けしての議論

【授業項目】

- 第1回／知的財産権の概説(発明の本質、特許法の全体像など)
- 第2回／知的財産権の概説(企業・大学における特許の必要性など)
- 第3回／発明完成から権利化まで(出願・中間処理・拒絶査定不服審判・審決取消訴訟)
- 第4回／特許要件(新規性、進歩性、先願主義)、明細書の書き方
- 第5回／特許権の効力、利用関係、侵害、明細書の実例検討
- 第6回／同上
- 第7回／侵害訴訟、実施権・移転
- 第8回／先使用权、職務発明、ビジネスモデル特許、演習(1)(明細書作成・自宅起案)
- 第9回／演習(1)の解説、演習(2)(明細書作成・自宅起案)
- 第10回／演習(2)の解説、演習(3)(自説の起案)、演習(4)(侵害鑑定の起案)
- 第11回／演習(3)、(4)の解説及び討論
- 第12回／特許法以外の周辺法(実用新案法、意匠法、商標法、不正競争防止法、著作権法)、外国の特許制度
- 第13回／総まとめ
- 第14回／演習(5)及び解説
- 第15回／演習(6)及び解説

【教科書】

現時点では特になし。特許法などについて詳説された書籍は多くあるが、内容が高度なため、講義の進行状況や受講生の理解度をみて採否を決めたい。

【参考書】

工業所有権法(産業財産権法)逐条解説[第18版]発明協会発行

【成績の評価方法と評価項目】

演習の評価点

【留意事項】

講義の始めには必ず前回の復習を行う。
但し、自宅起案が2回あり。